

裕子「プロデューサー
がホモだ！！」

ニコウミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

やあ（・ω・）

ようこそ、ホモの小説へ。

このテキーラはサービスだから、まず飲んで落ち着いて欲しい。

うん、「また」なんだ。済まない。

仏の顔もって言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。

でも、このタイトルを見たとき、君は、きつと言葉では言い表せない「ときめき」みたいなものを感じてくれたと思う。殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい、そう思って、このスレを立てたんだ。

一話、一話が独立した短編集です。
登場するプロデューサーは皆、別人ですのであしからず

目次

また私なんだ、すまない	1
凛「プロデューサー、マッサージしてあげようか」	14
蘭子（24歳）「闇に飲まれた」	32

また私なんだ、すまない

「いきなり意味分からんことを言うな。エスパ―裕子」

「えすぱー伊〇みたいな呼び方は辞めてください!! さいきつく裕子でっす!」

渾身のドヤ顔で胸を張るアホの娘に呆れた視線を向けながら――俺は戦慄していた。つまるところ、凶星であったりする。そもそも社長にスカウトされた理由は他のプロデューサーがアイドルに手を出した過去を畏怖し、新宿二丁目で飲んでいた俺をスカウトしたのだ。

しかし。世間的に言えば俺は隠れホモ。アイドルにホモだとバレれると、最悪は関係の悪化などで首になりかねない。

まあ、裕子にバレたなら平気、平気。新宿二丁目で一番アホなアイドルは裕子って一番言われているから（曖昧）

「……一応言っておくが、俺はホモなどでは無い（大嘘）」

「嘘ですわっ!」

「……（なんだ? 幸子的なウザさを感じる……）」

「そもそも怪しいのは沢山あるんですよっ! なんて毎日毎日プロレスの雑誌を、しか

も筋肉露出の多い奴だけ買ってくるんですか!」

「は? いや、うえ、は? 違うし。俺はただ男爵デー〇のファンだから(震え声)」「分かりづらいネタ振りは辞めてくださいよっ!!」それで分かっちゃうくらい私もプロレス知り尽くしちゃったんですからね!!」

「プロレスデイスってんの?」

「なぜそこだけマジトーン……」

やっぱりホモだと呟く裕子。言葉を何処かでミスったのか危うくバレかけているが、なんせ相手は裕子。なんの問題も無い。まだまだ誤魔化せる余地は腐るほどある。なんせ相手は裕子だ。大事なことから一回。

「ふっ……そこまで言うのなら決定的な証拠があるんだろうな?」

「おふこーすっ!」

「ばーか」

「なんでっ!? 良いですよ! ゆっこがサイキックパワーでプロデューサーのスマホに決定的な証拠写真を念写してあげますから!!」

「ハッハッハッ超ウケるんですけどー」

「むつきいいいいっ!! 後悔しても知りませんからねえっ!! サイキック念写アッ!!」

両手を広げ俺のスマホに手を向ける。断言するが、まず成功しない。裕子のプロデューサーを務めて早一年近く、裕子が何かしらのサイキックパワーを持っている事実に最近気付いたのだが、十中八九、裕子はそれをコントロールしていない。この前も某四ツ葉クローバーの彼女が持つクローバーを七ツ葉クローバーにするとか頑張ったけど結局、向日葵が変わったから。こう文章にすると凄まじい所業だが、その向日葵が一秒で枯れたのはお察し。兎も角、裕子のサイキックパワーで俺に害する状況は起きない。

「いやあああああああああつ!? みくのお祝いに貰った薔薇が全部枯れたにやああああああつ!!」

マジかお前（戦慄）

「……可笑しなー……ちよつとサイキックパワーが足りないみたいですねっ!」

「お前実は植物系能力者じゃねえの?（震え声）」

「でもやつぱりプロデューサーはホモなんだよ! じゃないと…」

「大体さあ、俺がホモだとしてお前になんのデメリットがあんのさ!」

「そ、それは……」

何故か急に顔を火照らせそつぽを向く。なんでコイツ恥ずかしがつてんだ（ホモ特有の鈍感）

今日は二人で特に仕事も無くオフの日だから多少具合が悪くなっても大丈夫とは言え、やはり裕子はアホ故に体調管理が下手くそだ。あまり嬉しくは無いが、俺は裕子の額に手を置く。

「風邪か？」

「ひう……っ！　だ、大丈夫ですよっ！　サイキック裕子は風邪なんか引きませんから！！」

「馬鹿は風邪をひかない？（難聴）」

「そんな聞き間違いしますっ?!」

「——大変だよプロデューサー!!　ダルの手術が成功したって!!」

裕子をからかっていると隣の部屋でテレビを見ていた筈の野球バカ（姫川友紀）が缶ビール片手に飛び出してくる。うん。何故だろう、俺がプロデューズしているアイドルは基本的に馬鹿しかない気がする。

「別に良いだろ、日本を代表する選手だ」

「散々畜生発言しておきながら自らも怪我をするとは流石はダルだね!!」

「うーん、この」

「日本の選手が打ってくれないからメジャーに行ったらしいけどさ、怪我してちゃ意味ないよ。マー君もダルも怪我してちゃ二流だね、二流。やっぱピッチャーがメジャーに

向かってても成功する訳ないじゃん」

「なんでや！ 松坂はマシやろ!!」

流石は畜生、見直しました（真顔）

友紀はそのまま流れるように俺の隣に座りビールを飲み出すと改めて裕子と俺のコンビを見つめ直し、首を傾げた。

「そーいや、二人でなに話してるの？」

「プロデューサーがホモだって話をしていたんですよ！ 友紀さんもそう思いませんか!?!」

「え……タダ……」

「やめろユツキ。ちゃんとあの選手はホモじゃないって言ってただろ!!」

「プロ野球にホモって何人いるのかな？（唐突）私的には寺〇〇大は絶対にホモだと思うんだ」

「そんな、なんじ民しか分からないようなマイナーな選手を……」

「だってアナプリだけ？ 出てるんでしょ？」

「いや、顔が似てるだけ…ハッ!?!」

友紀と裕子の視線が交差する（コナン感）

「あつれー？（棒）プロデューサーなんで知ってるの？」

「なんJ民はホモに詳しいんだよ（震え声）」

「やっぱプロデューサーはホモなんですわねっ！」

まずい。裕子は兎も角、この姫川友紀と言う畜生アイドルは存外に鋭い。俺が隠れホモだと言うことがバレてしまえば。うん。別に問題ないのだけど、ほら、世間的にホモって淘汰される存在じゃない。やはり、ここは誤魔化すしか無いようだ。

「そう言えば雫と牛談義の時間だわ（唐突）」

「誤魔化すの下手くそ過ぎでしょ……」

「やっぱりプロデューサーはホモだ！ うわああああああつ！！ 認めたくありませんでしたよっ！！」

「ホモでなにが悪いの？」

「手のひらくるつくるだよ、プロデューサーー！」

頭を抱え唸る裕子と驚愕する友紀。もう開き直るしかねえな、これ。

「でも安心してくださいプロデューサーっ！ サイキック裕子にお任せ下さいっ！！」

「……なにが？」

「ふーん」

「興味ないっ!？」

だって裕子だしなあ。サイキックパワーで逆にホモ力が上がりそうな気しかないのはお察し。さつきから察してばっかりだな。裕子なら仕方ない。

裕子は徐に時子が普段、常備しているキツく縛っても痛くないロープを俺の引き出しから引つ張りだし、友紀に手渡すと、俺に蹴り寄る。

「なに？　なんでロープ持つてんの？　サイキックパワー（マジック）でもやれつか？　出来るよ」

「出来るのっ!?!」

「つか友紀までなんだ。俺がホモであろうと関係ないだろ？」

「いやあー……関係大有りってゆうか前から薄々気付いてたし……最悪酔わせた勢いでとか考えてたけど……まあさ！　これでホモじゃなくなるなら万々歳じゃん？　全く期待してないけど」

「ゆ、友紀さんまで言う!!　みんな、ゆっこを舐めすぎですよ!!　私だって本気出せばマインドコントロールくらい余裕ですっ!!」

「マインドコントロールは超能力じゃないぞ……いや、うん。まあ良いよ。時子に縛られ慣れてるし、好きに縛れよ（迫真）」

裕子のサイキックパワー（物理）に左右されるほど生半可なホモじゃない自負がある俺は為すがまま二人に縛り付けられる。友紀と裕子の器用さが発動したのか、上手い具

合に椅子から身動きできない程、ガツチリと縛り付けられてしまった。

そんな俺の目の前に裕子は立ち、何処からともなくスプーンを取り出した。

「まずは予行練習ですっ！ サイキックパワーっ!!」

「……」

「あれ……？ 可笑しいな……ムンツ！ あ、よし、曲がったっ!!」

「どう見ても物理なんです、それは」

「さああ!! 予行練習も終わりましたし、ゆっこ行きますっ!!」

「よし、プロデューサーから魔の心を消しちやえっ!! ホモに人権なんかないよっ！

タダノだって外国に追いやられたんだからさっ!!」

この畜生アイドルぶれないな。

裕子は何かの気合いを入れ、袖を捲ると頬を叩き始める。そして、その両手を俺の頬を挟むと真っ正面から目を見つめてくる。

「で、なんも起きないけど……」

「ゆっこサイキックパワーあああああああああああつ!!」

「……頑張るなあ」

「ぬあああああああああつ!!」

「アイドルが雄叫び上げるってどうなんだ？」

「ううむ……やはり超能力なんてあてにならないね！」

「ぬあああああああああああつ!!」

「畜生アイドルに変わらね……ッ!?!」

ふと隣に居る友紀を見つめた。

「可愛い。いや、なんだ。胸がドキドキしてくるレベルで可愛い。まるで男色ディー○を見たときのように、友紀が可愛い。」

「ぬああああああああサイキックパワー全開iiiiiiiiッ!!」

あれ、もしかして。

「……ん？ プロデューサー。なんか顔赤くない？ 大丈夫？」

友紀が不思議そうな顔を俺の顔に近付ける。

「うわあああああああああああああああああああッ!?!」

「ッ!?! ぷ、プロデューサーの身体から黒い霧が噴出してるッ!?! なにこれッ!?!」

「サイキックパワーあああああああああああああああッ!!」

「や、やめろオオオオオオオオオオオオッ!?!」

「き、効いてるッ! 効いてるよ、ゆっこちゃんッ!! プロデューサーからホモの元凶らしき何かが噴出してるよっ!! なんだこれっ!!」

友紀が。裕子が。段々と可愛く感じてくる度に、俺の男色ディー○に対する愛が消え

「——一目惚れしちゃえええええええええええええええええつ!!」

「——んあああああああああああああああああああつ!!」

俺の身体から謎の存在が全て消え去った感覚を感じた瞬間、裕子は両手を離し俺から離れる。そして額に溜まった汗を拭き取る姿を見届けた後、俺はやつとロープ抜けに成功し、地面に倒れ込んだ。

「……なに? なに? ゆつこちゃんどうなったの?」

「完璧ですねっ!! 核心的に成功しましたっ! ゆつこちゃんのサイキックパワーによりプロデューサーは正常に戻ったどころか、次に見た女性に一目惚れするサイキックパワーをかけましたっ!! (ドヤ顔)」

「次に見た女性に……つて?」

「つまり、プロデューサーが顔を上げて女性を見れば一目惚れしちゃうんですっ!!」

つまり、俺は誰か女性の顔を見れば惚れてしまうのか。えっ、なにそれ(困惑) ゆつこちゃんマジパネエ。だが、流石はゆつこ。一つミスをしている。これは核心的に理解した。俺は女性ではなく男性ディー○の顔を見れば全て解決だと言う事に。

「やってくれたな、ゆつこ……」

「ふふんっ! サイキックパワーです!」

「みんな! 俺から離れる!! 顔を見たら惚れてしまうのは間違いないだっ!!」

第一に、あらかじめ警告しておくことによってアイドル達の顔を見なくても済むようにする。俺に惚れられたいアイドルなど居る筈も無いので、これにより道が。

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「にやあ……パッション系アイドルがみんな一斉に牽制し合ってるにや……みくはCu Pちゃんのところに逃げるにや!!」

俺の周りに気配が増えた、だと(困惑)

「正気かお前ら!? 俺に惚れられたいのか!?!」

「いやー……アタシって二十八歳になってから親にいい人いないのかって言われててさ、警察から引き抜いたのプロデューサーくんだし、この際良いかなあーって」

「……待てよ姉御。アンタにそんな役目を押し付ける訳には行かねえ。あ、ああああアタシなら構わない……プロデューサーには恩があるから。ま、任せろ」

「プロデューサー。私を見て良いよ。ナイター見に行くって約束してたし何時までもそれじゃあ、ねえ?」

「一番頑張ったゆっこを褒めてくださいっ! ゆっこならサイキックパワーで元に戻せますよっ!(ゲス顔)」

駄目だ此奴ら。何を企んでいるのか知らないが、俺を通す気は無いらしい。このままでは男色デュー○を見る前に誰かの顔を見て惚れてしまう。やるしかない。少々危険

だが、COP先輩から教わったプロデューサー奥義を使う時が来たのかも知れない。

「プロデューサー秘技っ!! プロデューサー脱兎っ!!」

「っ!？」

説明しよう。プロデューサー秘技・プロデューサー脱兎とはアイドル達の溢れんばかりの愛を爆発させ十五階の窓から飛び降りる技。アイドル達の愛が少ない俺がこの秘技を使うと二パーセントの確率で怪我をしてしまう、COP直伝の対ちひろ用秘技である。

「化け物かアンタは!？」

「ふはははははははっ!! 俺はもう一度ホモに戻るぞオオっ!! ゆっこオオっ!!」

振り向き、駆け出そうと顔を上げた。

「あ、せんせー! おはようございますっ!」

目と目が合った瞬間、俺は薫に恋をした。

く完く

凜「プロデューサー、マッサージしてあげようか」

「マッサージ?」

吐息が白く染まり始めるような、とある冬の真昼時。自分が任されているアイドルが突然、そう言った。

マッサージ。働き出してから肩凝りが気になっていたモノの、俺は専門のマッサージと言うのを体験したことがない。パソコンを使う仕事柄、肩凝りとはマブダチと呼んでも過言ではない間柄だが。まさか担当アイドル、渋谷凜から心配されるほど、酷いモノだったのか。

「プロデューサー、最近は腕を回したり自分で肩を揉んだりしてるからさ。あんまり自分でやっても治らないよ?」

「あー……確かに、幸子の小坪トンネル突撃レポートから、なんか妙に肩が重いんだよなあ」

「だからさ、マッサージしてあげるよ。最近ハマってて、色々勉強してるんだよ」
「マッサージの勉強? ……珍しいモンを勉強してんな」

「ヤツて上げるよ、マッサージ。良いでしょ? みんなやってますから（意味不明）」

「なに？　なんかグイグイ来るね。落ち着け、ステイ」

俺の上着を掴み剥ぎ取ろうとする凜を押し止める。鼻息荒い上に何か迫真迫る物があつて凄く怖いんですが。

しかし、マッサージか。確かに肩が凝っているのは事実。だが、それをシンデレラアイドルにやつて貰うと言うのは如何なモノか。

「大丈夫だから（意味不明）」

「いや大丈夫じゃねえよ。それに、お前はこの後、仕事だろ？」

「一時間くらいで終わるよ。さっ、上着脱いで」

「いやだから……」

「私も速く終わらせたいの（半ギレ）」

「ええ……」

物凄くモヤ　ツとする感覚だが、何故か凜は一切譲るつもりがない。何が何だか分からないまま、俺はスーツの上着を脱ぎ椅子に引っ掛けた。

「……………」

それを凜はジツと見ている。

「……………」

動こうとしない凜を不思議そうに見つめ返すと、途端に眉を潜め出す。

「脱いでよ」

「いや脱いだよっ!？」

「は？ あのさあ……裸になってくれないとマッサージ出来ないよね？（意味不明）」

「い、いやいや。流石に誰も居ないとは言え、事務所で裸になるのはアレだろ……それに凜の前で裸になるとか」

「大丈夫」

「いや、大丈夫じゃ……」

「大丈夫だから（半ギレ）」

「ええ………（戦慄）」

なんでキレてるのこの子。目付きが鋭いから普通に怖いんですけど。マッサージつて裸になるモノなの。専門の店に言ったことがない俺としてはキツパリと言えない所だが、少なくともアイドルの前で上半身裸になるのは可笑しいだろう。

「はあ……プロデューサーさ。マッサージつて詳しく知ってるの？」

「えっ……いや、詳しくは知らないけど……」

「だよ。マッサージで裸にならなくても良いと想ってる素人だもん。良い？ マッサージつて、言わばリンパを直接解すモノなの。それには裸になって貰わないと出来ないんだよね」

「……そうなの?」

「そうだよ（真顔）」

「いやでも、アイドルの前で上半身裸ってのは……それに、誰か来たら」

「それは大丈夫だよ。十八時にまゆが帰ってくるまで誰も帰ってこないから」

指でホワイトボードを指差す凜に釣られ、目を向ける。確かに書かれたスケジュールによれば、今から三時間後のまゆの帰宅まで、事務所は俺と凜しかいない。

「……でもなあ」

「プロデューサー、私は純粋にプロデューサーを心配して言ってるだけだよ。プロデューサーの為にマッサージを勉強したんだから……やらせてくれないの?」

「むう……」

眉を潜め、何処か悲しそうにする凜に俺の心が揺さぶられる。最初は冷たい子だった凜が、俺を心配してくれ、さらにマッサージまでしてくれると言うのは寧ろ喜ばしい事だ。

頭を乱雑に掻き、此方を真っ直ぐと見つめる凜の視線に照れる。

「プロデューサー」

「分かった。分かったよ……そこまで言われちゃ断れねえさ。脱ぐよ」

溜め息交じりの苦笑を返し、俺は席を立つ。凜の嬉しそうな熱い視線を受けつつ、ネ

クタイを外しワイシャツのボタンを解いていく。事務所で、しかも凜の前で上半身裸になるのは抵抗があるが、私服でもタンクトップを好む俺だ。今更か。

「プロデューサーって筋肉凄いよね」

「COPだからな。元軍人つてのもあるが、昔はプロボクサーだったし」

「……今更だけど、なんでプロデューサーになったの？」

「ちひろさん……いや、あまり想い出したくない。想い出すと軍人時代のトラウマが蘇る」

「う、うん」

戸惑った凜の視線を流し、俺は遂に上半身裸になる。脱いだシャツを椅子に放り投げ、凜に向き直った。

「で、脱いだけど」

「じゃあ、仮眠室のベッドで寝てて。準備してから行くから」

「準備？」

「媚……オイルとか。コン……手袋とか」

「……まあいいや。了解」

何故かどもる凜を余り気にせず、仮眠室へと向かう。

俺は主にクール系アイドルを担当しているので、約八十人近いアイドルを担当してい

ることになる。その為か、家に帰れないことが多々ある為、それを見越したちひろさんが仮眠室を造ってくれたのだ。最近パッション系アイドルを担当しているプロデューサーが良くアイドルとの個人面談に使っているらしいが、余談だ。

仮眠室に用意された割とお高いベッドに寝転がる。やはり高いだけ合っただけかなり気持ちいい寝心地だ。上半身裸に違和感がなければ寝ていただろう。

「お待たせ、プロデューサー」

「ん……おう。で、どうすりゃ良いんだよ?」

「プロデューサーは寝てるだけで良いよ。そのままうつ伏せに寝ててね」

「うい」

言われた通り、枕に顔を埋めて力を抜く。軍人時代には常に張り詰め、こんな寝方はしたことがないが、近くに信頼出来る人物、つまり凜が居ると安心感から眠くなっている。

「じゃあ、ちよつと揉むよ」

「おう……んっ」

ぎゅつと肩が凜の手で押される。些か力が弱いのが、意外と気持ちいいモノだ。そのまま抵抗しないでいると、凜の肩揉みは続けられた。これは良い。

「……っ」

「ああー……自分でもこんな凝つてるとは想わなかったな……気持ちいいよ、凜」

「もう一回言つて」

「は？」

「もう一回言つて」

「……き、気持ちいいよ、凜？」

俺が眩くと同時に、背中から何故か電子音が響く。

「ありがと」

「なに今の音？」

「ボイスレコ……携帯だよ。奈緒からのメール。あんまり気にしないで」

「……お、おう」

随分と変なタイミングでメールが来たモノだ。しかし、メールはメール。他人に何時にメールを送れ等言う訳が無い故に、何時来ても可笑しくない。俺はあまり気にせず、凜のマツサージを受ける。

上手いモノだ。身体の血流が良くなってきたのか、日の暖かさのような温もりを感じさせ、眠気を誘う。

「よし、じゃあ今から媚……オイルを使うから」

「オイル？」

「マッサージ用オイル（意味深）だから」

横目で見てみると、凜はオイルを洗面容器にぶち込み手でかき回している。お前は風俗嬢か。アイドルに言う例えではないが、動きはどう見てもソレ。あえて突っ込まないがいかかわしい想像をしてしまう。

「そ、ソレ、どうすんの？」

「プロデューサーの背中に塗るよ。大丈夫。みんなやつてるから（意味不明）」

「い、いや……あつ」

ペタリと、凜の手に乗るオイルが俺の背中に塗られる。程よい暖かさと力加減。風俗嬢かお前は。

「じゃあこの状態で全体的に揉んでいくよ」

「おつ……おお……見た目は兎も角……これは……」

オイルのお陰か、何故か背中が熱くなり気持ち良くなっていく。いや、背中処か気持ちいい胸苦しさを感じるほどだ。本格的なマッサージってのはこう言うモノなのか。確かに、ハマる人が居るといっものは分からなくもない。

「腰に下がっていくよ」

「ん……？ ふう……いや……はあ……別に其処まで……」

「大丈夫だから（意味不明）」

「おおう……」

徐々に手が下がり、気持ち良く凝りを解していき、最終的に腰を揉む。漏れる息が段々と熱くなつていく。なんだこれ。マツサージってこう言う状態になるの。恐いな、マツサージ。

「……………」

「ああ……上手いなあ、凜は……」

「……………」

「腰が解れていくわ……眠気が消えるくらい気持ち……」

「ふんツ!!」

「ああんツ!?!」

凜の手がズボンに差し込まれ、俺の尻を揉みしだいた。

「えっ!? なに!? なんてズボンに手をつ突っ込んでんのツ!?!」

「大丈夫だから(意味不明)」

「いや……ツ!?!」

「みんなやつてるから(半ギレ)」

「やつてねえよツ!?! 絶対やつてねえよツ!?!」

「リンパがアレなんで(意味不明)」

「いやいやいやいやいやいやいやいや!! ちょ、やめ、一回揉むの辞めてッ!」
「邪魔されると終わらないんだけど(半ギレ)」

オイル塗れの手で生尻を揉む性でスーツのズボンがベタベタになっていく。それでも凜は揉むのを辞めずに無表情で淡々と触りまくってくる。

「ヤメロオツ!! (本音) ヤメロオツ!! (本音)」

「私も速く終わらせたいから黙ってて(マジギレ)」

「尻を揉む必要性ないだろッ!」

「リンパがアレだから(意味不明)」

「アレって何!」

「此処が一番リンパなんで(意味不明)」

「お前辞書でリンパ調べて来いよオツ!! ちょ、やめ……なんか身体が痺れて動けねえッ!? なにこれッ!」

「分かったよ。じゃあ前もやっちゃおうか(意味不明)」

「なんでッ!? ああんッ!!」

凜に身体を回され、うつ伏せから前向きに。この体勢は非常に危うい。何故かって凜の手が俺の乳首を襲うから。

「リンパなんで(意味不明)」

「お前誤魔化す気無いだろツ!?　ちよ……や、やめ……」

「リンパが堅くなってきたね」

「堅くなつちや駄目だろツ!?　おま、何処見てんのツ!?」

「プロデューサーのプロデューサーかな（野獣の視線）」

「や、や……ヤメロオツ!!　洒落にならんぞ凜ツ!!」

「暴れられると終わらないんだけど（マジギレ）」

「お前、それでゴリ押せると想ったら大間違いだからなツ!!　さつきから無意味な言い訳なんなのツ!!」

「じゃあこのままリンパ解すよ（謎）」

ま、マズい。普段から変な片鱗を見せていたが、此処まで大つびらな行動に出ることは無かった。キュート系アイドルを数人担当している身として、アイドルの暴走は予知出来た筈なのに。ミスだ。完璧なミスだ。

出来れば使いたくなかった手だが。やるしかない。この状況を打破するには、呼ぶしかないのだ。

「——助けてまゆうううううッ!!」

俺は禁断の言葉を含め、名を呼んだ。

佐久間まゆ。

俺がスカウトし、キュート系プロデューサーに任せようとしたら遺憾のクール系移行を決定したクール系キュートアイドル。普段から鈍いだの唐変木だの言われる俺でも、流石にあの娘の好意には気付いている。

まずスカウトした日に、俺の携帯に盗聴器が仕掛けられ、空き家だった隣の家には超音波式音声機と言う軍用の盗聴器が仕掛けられた。次の日には交友関係や両親の家系まで調べ上げられ、あと一步で婚約させられる手前まで持っていかれた手腕を持つアイドルだ。

俺が軍人と言う経歴を持っていなければ勝つ（謎）ことは不可能だった。そんな彼女。俺が名を呼べば何故か現れるのだ。本当に不思議だが、呼んで二秒も立てば後ろに立っている。前にちびつたのは此処だけの話。

「……………なん……………だと……………」

——だが、まゆは来なかった。

「じゃあリンパするから（意味不明）」

「いや、ちよ……………ッ!! や、ヤメロオツ!! まゆッ!! 助けてまゆうううううッ!!
まゆううううううッ!!」

「声出すとマッサージ出来ないから（意味不明）」

「やめ……………ベルトを掴むなって……………ベルト外すの速ッ!? 何そのテクニクッ!!」

凜の謎テクニクによりズボンを剥ぎ取られる。俺のプロデューサーは既に臨戦態勢。しやあないやん。男ってこんなモンよ。凜の怪しげなマツサージはゆつくりと腹を添い、そのまま、パンツの中へと――

「――プロデューサーさんッ!!」

突然、ドアが誰かの体当たりで開かれた。其所に居たのは、俺がプレゼントした水色のセーターを着込む、歩くセックス。間違えた。今の状況だと似たようなニュアンスだから間違えた。他意は無い。

「うおおおおおおおオオオオオオッ!! グッドタイミングだ美波イイイイイッ!!」

新田美波。俺がスカウトした順番で言えば五十三人目くらいのアイドルだ。

「美波、どうしたの?」

「言つたれエみなみっちゃんッ!!」

「……………り、凜ちゃん? な、なにやってるの?」

目を見開き瞬きを数回。パンツ一枚でベッドに倒れる俺と、オイル（媚薬）だらけの手でパンツを掴む凜を唾然と見つめた。分かる。俺も似たような現場に居合わせたら如何すれば良いか分からないからね。

「マツサージ」

「えっ？ いや……でも……」

「マッサージだから（半ギレ）」

「え、えええ……ち、違うと想いますけど……だってこれ……」

「じゃあ美波はなにやっていると想うの？」

「ふ、ふえええっ!!? あの……その……えつと……」

真顔の凜に真つ赤な美波が視線を戸惑わせて俺を見つめる。クソ。歩くセツクスとか言われてる癖に変なところでウブが出やがった。このままじゃ凜に流されてしまう。

「違うぞ美波イツ!! 流されんなッ!! これはマッサージじゃねえッ!! 間違いないくマッサージじゃねえよッ!!」

「プロデューサー、疲れてるんだってさ。美波もヤツて上げれば？」

「へえっ!!」

「美波も、マッサージしてあげれば？」

「……ま……マッサージ……」

目をぱちくりと開き、俺のプロデューサーを見つめた。あ、これ流されるパティーン（バブル感）だ。クソ。最終手段を呼ぶしかない。まゆを超え、凜すらも超える究極のクール系アイドルを。

「やるしかねえッ!! あ……——ああ、なんか急に茄子に会いたくなってきたわ

「っっ!!」

「ッ!?!」

俺の発言に初めて凜が危機感を感じ、身体を魚籠つかせた。そう。あのアイドルだけは、何をしようが止められない。

俺が二番目にスカウトしたアイドル。

名を鷹富士茄子。

「たっだいま戻りましたよ♪ プロデューサーさあーん、聞いて下さいよー。茄子ちゃん、六億円ジャンボまた当たっちゃって……………へ?」

俺が呼ぶと大体来る。まゆ的な策略的じゃなくて、本当にたまたま運良く来る。何故か、俺が呼ぶと運良く来る。

「助けてナスっ!!」

「ナスじゃなくて茄子ですうっ!! と言うか…………何やってるんですかあ?」

「後で説明するから助けてッ!!」

「くっ…………茄子さん、一緒にマッサージしようッ!!」

「お前、まだこの期に及んでマッサージって言いはんのかッ!? 凄いなその神経ッ!」

「わ、私は…………」

「……………んん? 茄子ちゃん、良く分からないんですけど?」

場が混乱し始め、凜は何とか状況を戻そうと必死にパンツを下げようとしてくる。俺はそれを必死に抑え、その様子を美波が目を見開き見つめていた。

唯一、茄子だけが冷静にそれを見つめ、首を傾げている。

「そなたー。そなたー。現場からちよつきつてなんでしてー？」

更に混乱する。

この場で計り知れない戦闘力（アイドル力）を持つアイドルが直帰の筈なのに直帰の意味知らなくて事務所に戻って来ちゃった。

依田芳乃。この娘だけは誰にも止められないし、そもそもどう言う存在なのか知れば知るほど意味不明。

「芳乃、直帰つてのは家に直接帰ることだけど今はナイスッ!!」

「そうなのでしてー。まっこと、ぎょうかいごとと言うのは難解でしてー」

「芳乃、ナデナデしてやるぞッ!!」

「ナデナデして欲しいのでしてー」

今の状況で尚態度を変えず、マイペースな芳乃は頭を俺に向け待つ。その瞬間、何故か俺の身体の痺れは消え去り、媚薬の火照りも無くなる。

「ああっ!! あとちよつとだったのにつ!!」

「テメエエエエエ今回はマジギレしたからなアアアアアアッ!!」

「ひゃんっ!? あ、アイドルを殴ったっ!!」

「頭引っぱたくだけで済むと想ってんのか、アアンツ!?」

「そなたーそなたー。頭ナデナデー」

「芳乃おとおおッ!! お前は本当に可愛い奴だッ!! ナデナデしてやる、ナデナデッ!!」

「おぉー。何時もより激しいナデナデなのでしてー」

芳乃の頭を撫でながら、俺は凜を睨む。

「テメエ、正座しろッ!!」

「マツサージだもんっ!!」

「世の中のマツサージ師に謝れタコツ!! お前がやってんのはマツサージじゃねえッ!!」

——企画モノAVだアアアアアアアアアアッ!!」

渾身の力で叫ぶ。それはもう自分でもビックリするくらい。

右手で芳乃の頭を撫で、身体はオイル塗れ。涙目の凜が俺のパンツを掴み、傍には顔を真っ赤にした美波と、俺の股間を凝視する茄子。

気付くべきだったのだ。この状況が如何に異常かを。

気付くべきだったのだ。真後ろに居る。神谷奈緒の存在を。

「プ、プロデューサー……………」

「ッ!? な、奈緒ッ!」

「そんな……っ」

「えっ? いや、ちが、違うぞツ!? これには列記とした訳が……ツ!!」

「——プロデューサーのド変態野郎おおおおおッ!!」

「——まってくれ奈緒おおおおおッ!!」

「——こうして俺は事務所を首にされ、新たな事務所を設立することになってしまった切っ掛けだ。」

「この時はまだ知らなかったんだ。まゆが、俺の婚姻届を市役所に提出していたなんて。」

く続かないく

蘭子（24歳）「闇に飲まれた」

「ぜつつつつつたいに嫌ですッ!!」

「蘭子、口調口調」

「こ、これが普通なんですぅーっ!! 普通の熊本弁だぎやつー!」

「お前それ名古屋弁だからな」

「兎に角、イヤったらイヤなのっ!!」

突然だが、俺は困っている。理由は至極明快であり、何がと言われれば、目の前で火照る顔を掌で隠しながら異議を申し立てるアイドルに対してだ。名前を神崎蘭子。年齢二十四歳、アイドル歴十年の強者だ。十年前から厨二系アイドルとして活躍している蘭子ちゃんだが。

「そもそも何が嫌なの?」

「Pさんが持つてくる企画が嫌なんですよっ!!? なんですか、これっ!!? 大天使サチエルとの悪魔について対談ってっ!!」

他にもルシファアの裏切りについてとか、エクソシストについてとか、G O I M M のブルクハルト刑事はそろそろ恋愛を辞めるべきかとか様々な有力者（厨二患者）と対談

する企画も用意してある。

「お前の専門じゃん（真顔）」

「二十四歳のアイドルが悪魔について語るってッ……もうッ……もうッ……可笑しいでしょうッ!？」

「ええ……お前が言っちゃうの……（戦慄）」

「厨二が何時までも続くと思ったら大間違いなんですよおッ!! 私が親戚や親からどんな目で見られているか教えてあげましょうかッ!？」

「言われなくても優に想像出来るわ（苦笑）」

「うんもおーッ!!」

「はっはっは、どすこい、どすこい」

蘭子の軽い連打を受け止めながら、俺は昔を思い出していた。リアル中二だった頃の蘭子ならこう言った企画は自らが計画するくらいやる気に満ち溢れていたのに、時とは残酷である（様々な意味で）

「私の昔がテレビに映る瞬間、私がどれだけ死にたくなるか分かってますかッ!？」

「俺がテレビで闇に飲まれるとか言ってる過去映像流されたら死ぬるね」

「分かってんなら何とかしろやアッ!!」

「蘭子ちゃん、口調、口調」

「栄光なる救済を我が手に……（なんでもしますから、助けて……）」

「ンウ拒否するう」

「にやあああああーッ!!」

「はっはっは、みくにゃん、みくにゃん」

まあね、ほら、分かりますよ。俺だつて想い出したら死にたくなる過去は幾らでもある。中学の頃なんか「まずうちさあ、靈感あんだけど見てかない?……（誘い目）」とか言つて自称靈感ある振りをしながら、ある程度のにわか（李衣菜）知識で霊媒やつてみたり。背中が筋肉痛になったら、「翼が生えてきそう……（墮天使感）」とか親に訴えたしね。なんか想い出すだけで死にたくなる過去（実話）だな。

「嫌だよう……もう自分が満面の笑みで厨二言葉話してゐる姿を全国放送で見たくないよう……」

この子の場合、人気故に未だに過去の映像使われるから不憫でならない。もう一度言うが、俺なら死んでる。

「分かつたよ、蘭子」

「P、Pさん……っ!!」

「これからは黒歴史恥ずかしがり系アイドルで攻めるか」

「んもおおお今と一緒おおおおおっ!!」

「はっはっは、どすこい、どすこい」

「嫌だよう……闇に飲まれよとか言ってる自分を全国放送で見たくないよう……街歩くだけで微笑まれるの嫌だよう……」

「……………」

「親に生き方を間違えるなって最近、真顔で言われるんですよ……どうしろって……どうしろって……」

親にそれ言われるのキツツいなあ（戦慄）何が答えるってね、親からクスクス笑われるまでは良いけど、笑わなくなると真顔になってきた辺りが一番、心に来る。

「じゃあ、そうだな……こう言う事柄に慣れてる究極の猛者に相談すつか」

「猛者……ですか？」

「厨二とか黒歴史とか、もう全てを無に返してる究極の心臓を持つ先輩だよ」

「…………ツ！ まさか、あの人につ!!」

「ああ、俺も出来るなら弄りたくないレベルまで引き上げてしまった……キュート界を代表する、あの方に、お前の悩みを相談しよう」



「と、言う訳で、本日は宜しくお願い致します。菜々さん」
「喧嘩売ってますか？」

「菜々さん……私、もうどうしたら良いか……」

「え、ええ……菜々に言われても……」

キュート界の女帝・安部菜々さん（17歳）。

最近は喉の調子が悪くてキャハとか言えなくなってきたらしい。五年前のVTRでも自信満々に十七歳を自称している彼女。現状、ファンからもそろそろカミングアウトすべきと言う助言を蹴っ飛ばしている猛者だ。安部菜々さんなら、菜々さんならきつと蘭子の悩みを解決してくれる。

「菜々さん、ラブリー十七歳ってやってみて下さい」

「こ、この流れでそれを迫るんですか……」

「お願いしますよお、菜々ちゃん……」

「蘭子ちゃん、口調が、口調が変ですよ」

「コレが普通だつて言ってるだろッ!! ぶっ殺すぞッ!!」

「ヒツ……ごめん、なさい……」

大分病んでんな、此奴（他人事）

「落ち着け、蘭子。お前より十三年も先輩の方だぞ。歌手で言う榎原 敬之さんと同い

年なんだからな」

「……ごめんささい、菜々さん。私、私、如何したら良いか分からなくて」

「い、いや、菜々はれつきとした十七歳なんですからねっ!? 槇原 敬之と同じ年とかそういうの辞めてくれますっ!?」

「オールナイトニッポンとかリアルJK時代くらいでしょ?」

「あれは大学…じゃなくてええええっ!! プロデューサーさんがそうやって菜々の年齢引き上げるから周りの目がおかしくなるんでしようがっ!? 私の実年齢三十から五十ってファンの中で噂されてるんですからっ!?」

「お前だつて俺と同じ…」

「やめろ、ぶっ殺すぞツ!!」

「え、プロデューサーさんって三十……あつ（察し）」

自分を偽ってる系アイドルは怖い（確信）

心理に気付いた蘭子が気まずそうな顔で菜々さんを見ている。まあ、菜々さんと俺は同級生なんだけどね。空軍の道を歩んだ俺と中学校で別れ。

「まあさ、十年越しに出会った同級生が十七歳を名乗ってアイドル活動してたんよ。それからもうね。笑うしかないよな」

「で、でも菜々さんは未だに十七歳を名乗ってるじゃないですか。誕生日ケーキだつて

蠟燭は十七本だし……あの、どうしたら菜々さんみたいに芸風だつて割り切れますか？」

「……しだつて……」

蘭子の問いに顔を俯かせ、振るえ出す。それはまるで、今まで抑えてきた波が乱れたように。堪え、耐えてきた防波堤が崩れ去つたように。何かを覚悟した菜々は真つ赤に染まる涙目の顔を俺に向け、

「私だつてこのキャラ辞めたいんですよおおおおおおおッ!!」

叫んだ。それはもう、心から。

「ええ……」

蘭子が引いてる。俺も若干引いてる。

「私が親とか親戚とか友達からどんな目で見られてるか知ってますかッ!」

「知らなくても想像出来るわ(苦笑)」

「んもおおおッ!!」

「はっはっは、みくにゃん、みくにゃん」

菜々さんの拳を華麗に受けつつ、俺は確かにデジャビュを感じていた。

まあ、確かに。自分の娘(三十代後半)が自信満々に十七歳と言いつ切る姿をテレビで見た親の気持ちを考えると。居たたまれない想いはある。

「私の昔がテレビに映る瞬間、私がどれだけ死にたくなるか分かってますかッ!?」

「もし俺がテレビで十七歳キヤハとか言ってる姿を見たら死ぬね（半笑い）」

「分かっているなら助けて下さいよおおおおおおおッ!!」

「はっはっは、ウサミン、ウサミン」

ん？　なんかこのやりとりは十分前にやったな。デジャビユでもなんでもないわ。

女性が年齢の鯖読みなんて昔は良くあったが、アレって今でもあるのかね。流石に三十代後半の十代に見える容姿の女性が、十七歳を名乗ってるのはちよつとキツイ。いや、大分キツイ。

「分かったよ、なっちゃん」

「P、Pさん……昔の呼び方で……っ」

「これからは自称十八歳系アイドルで攻めようぜ」

「んもおおおお今と一緒におおおおおッ!!」

「はっはっは、しきにゃん、しきにゃん」

「嫌ですよ……親にっ……親に将来考えろって真顔で言われるの嫌ですよっ……私がつ……私がどんな想いでっ……もう婚期ワードなんか見たくないよう……」

「わ、私は理解出来ますよ、菜々さんっ!! 泣かないでっ!!」

「ら、蘭子ちゃん……っ」

ヒシツと菜々さんに抱き付く蘭子。

「そりや私だつてアイドルですから、中学時代はモテましたよっ!! でも、その、アイドル始めた時から、す…好きな人いるし…告白は断つてきましたけどっ!! 最近、私に告白してきた中学の同級生に出会った時、なんて言われたと想います!?!」

「蘭子ちゃんっ…!?!」

「お前ヤバいな、の一言ですよッ!? うっせえんだよボケがッ!! 私だつて自分のヤバさくらい分かつてるわッ!! 分かつてるからやつてられないんだよッ!!」

「ら、蘭子ちゃんっ!?! 口調が、口調がヤバくなつてますよッ!!」

「我が過去の同胞は永久の彼方にッ!! (私の同級生、みんな死ねッ!!)」

「蘭子ちゃん、余計にヤバくなつてますよッ!?!」

此奴ら面白いな(他人事)

この痛々コンビで番組やつたら面白くなりそう。後でチツヒーに相談してみようかな。

「助けて、プロデューサーさん…!?! (懇願)」

「ぶ、プロデューサーさん。蘭子ちゃん、かなりヤバいですよ。ちよつと真剣に助けてあげましょうよ。情緒不安定過ぎて危ないですよ、色んな意味で」

「助けてって言われてもなあ…!?!そもそも、蘭子は如何したいんだ? キヤラ辞めて、普

「引退してどうするんですか!? やりたい事があるんですか?」

「お嫁さん」

「小学生かッ!! 二十五の女が語る将来にしては重すぎますよッ!!」

「私、プロデューサーさんと結婚します」

「ファッ?!」

蘭子ちゃんの訳が分からない宣言に二人で反応してしまう。俺と結婚って、お前。

「いやいや、待て。俺と結婚ってお前……なっちゃんとはゲのキュートPさんが結婚するくらい有り得ないだろ」

「なんですかつ!? じ、十分にあり得ますよっ!? と言うかキュートPさんのハゲはファッションハゲだから大丈夫ですしっ!?」

「結局はハゲだろ、なんだよファッションハゲって。初めて聞いたわ。誰もファッションでハゲないからな」

「兎に角、私はPさんと結婚するのっ!! 親にもPさんと付き合ってる体で十年前から嘘ついてるもんっ!!」

「十年前ってお前十四歳じゃねえかつ!? どんなロリコン野郎だ俺はっ!? つうか何嘘ついてんのお前!」

「こんな私にも彼氏がいるって言わなきゃとんだ親不孝娘じゃないですかッ!? 私が厨

ニキャラでアイドルやるって自白した時の親の顔が分かりますかッ!?」

確かに、俺が蘭子の親なら真剣に止める。それで普通のアイドルとして頑張れって言うな。多分。

「いや、でもな……」

「私はPさんの事が好きだったんですよッ！（迫真）」

「ら、蘭子ちゃん、大丈夫？ 多分、後で思い返したら死にたくなる告白の黒歴史になりますよ……っ?」

「んじゃ結婚すつか」

「はいっ」

「フアッ!?!」

こうして俺は蘭子と結婚した。

この時、俺は知らなかった——

同期である渋谷凜のプロデューサーが佐久間まゆの策略により、あんな事件に巻き込まれているなんて——

く続かないく